

みどりの Gift

FEELINGS OF FOREST

公益社団法人北海道森と緑の会

[ギフト]



緑の栄光
NO.66
MARCH 2019

「お魚殖やす植樹運動」の30年

豊かな海を 守る森づくり

 緑の募金

春 期:4月15日~5月31日

北海道緑化募金:6月1日~6月30日

秋 期:9月1日~10月31日

原画:北海道留萌高等学校 2年 渡部 真美さん(平成30年度応募作品)



公益社団法人
北海道森と緑の会
理事長
堀達也

誰でも参加できる 森づくり

苫小牧市にある「苫東和みの森」をご存じですか？

平成19年6月に天皇皇后両陛下のご臨席のもと、第58回全国植樹祭を開催した場所です。両陛下がお手植えをされたアカエゾマツをはじめ、約1万人の参加者が植えた木々は大きいものでは10メートルを超える高さになり、今は間伐などの手入れが行われています。

この森の運営は、民間団体や個人も参加する苫東和みの森運営協議会が担っており、下草刈りや除伐、間伐などの手入れは、多くの森林ボランティア団体などがエリアを分担して自主的に行っています。他の県では全国植樹祭の植栽地は公園などにして公的に管理するのが一般的で、苫東和みの森のようにボランティアによる森林整備が行われているのは珍しいことです。

ここでは、誰でも参加できる木育イベント「月に一度は森づくり」が毎月開催され、参加者は、薪つ

くり、木工、木道づくり、アウトドアクッキングなど好きなことをして森を楽しみます。また、修学旅行での森林づくり体験や高齢者による森林整備なども活発に行われて、森林ボランティアの聖地のような場所になっています。

さて、来年初、第44回全国育樹祭が北海道で開催されます。全国育樹祭は、植樹祭で天皇皇后両陛下がお手植えされた樹木を元気に育てるため、皇太子殿下が枝打ちなどのお手入れを行い、国民参加で森林を育てる機運を盛り上げる行事です。記念式典は札幌市で開催される予定ですが、皇族殿下によるお手入れ行事は苫東和みの森で行われ、また、全道各地でも様々な記念行事が予定されています。

誰でも参加できる森づくり。苫東和みの森のような取り組みを全道、全国に発信し、木育や育樹活動の輪を広げていきたいと思えます。

巻頭によせて



NPO法人 森は海の恋人
理事長
社団法人
伊山重篤氏

「森は海の恋人」30周年です

平成元年に「森は海の恋人」を標榜し、漁師による落葉広葉樹の森づくりを開始してから丸30年を迎えようとしています。

当時、気仙沼湾でカキやホタテの養殖をしている私たち漁師は大きな問題を抱えていました。湾内に赤潮が発生してカキの成長が悪化し、養殖も起るようになっていたのです。カキの産地は全国的に河川水が流入する汽水域です。餌となる植物プランクトンが大量に繁殖する海域だからです。気仙沼湾には二級河川の大川が流入しています。大川流域に問題がある、と直感しました。

河口の干潟を埋めて建てられた水産加工場からは醤油のような褐色の煮汁がそのまま流されています。水田には生物の姿がありません。農業・除草剤などの問題があるなと感じました。流域の山林は戦後の拡大造林計画で植えられた杉林が続いています。間伐が進まず、光が入らないので下草が生え、バサバサ乾いて生き物の姿が見えません。更に、河口からわずか8キロ地点にダムを建設する計

画が持ち上がっていました。全国のカキの産地を歩いていた私は、ダムや河口堰が造られると海が枯れてしまうことを目の当たりにしてきました。そして、縦割行政は全く解決策を持っていないことを知ったのです。

北海道大学水産学部の松永勝彦氏と出会い、森と川と海との科学的つながりを教えてもらいました。森林の腐葉土中で生まれるフルボ酸は海藻や植物プランクトンの成育に不可欠で、磯焼けの原因である石灰藻を殺す成分も森林から出ているのです。そのような成分の流入を止めてしまうダムや河口堰は、海にとって迷惑この上ないものなのです。幸いなことに公共事業の見直しがあり、ダム計画は中止になりました。

東日本大震災に見舞われたとき、海から生き物の姿が消えてしまい絶望の日々が続きました。しかし、5月を過ぎると生き物が戻ってきました。湾に注ぐ大川流域の環境を整えていたからです。「森は海の恋人」。この言葉は真理です。

Contents

04 — 「お魚殖やす植樹運動」の30年
豊かな海を守る森づくり

07 — 「森のようちえん」で見られる
アクティブ・ラーニング
名寄市立大学 保健福祉学部 社会保育学科 准教授
柳原 高文さん

08 — Green Report～緑化だより
北海道森と緑の会と一緒に緑化活動に励む
元気で活発な団体や事業をご紹介します。

10 — 平成30年度
緑化活動啓発作品コンクール入賞者

11 — 第44回全国育樹祭
ポスター原画、大会テーマ、シンボルマーク

12 — 平成30年度
北海道森と緑の会
活動報告／緑の募金ニュース

14 — 山を育てる仲間たち

15 — 緑の募金インフォメーション

編集 株式会社アドバコム
Art Director 加藤大幸
二本柳燦
Writer 鶴見裕子(タオ)

「お魚殖やす植樹運動」の30年

豊かな海を守る森づくり

「浜の母さん」が行う植樹運動として

全国的にも注目されてきた「お魚殖やす植樹運動」。

平成元年にスタートし、昨年で30周年を迎えました。

一見つながらのなさそうな海と森が、

なぜむすびついたのでしょうか？

運動30年のあゆみとともにご紹介します。



目標は
「100年かけて
100年前の
自然の浜を」

地球上の生き物はさまざま
なつながりの中で生かされて
います。その生態系に大き

な影響を与えているのが森。

森のさまざまな機能は、海や

川の生き物にも深く関わって

います。雨水を蓄える機能は

急激な出水や土砂崩れを防

ぎ、魚の生育環境を安全に保

ちます。落ち葉は、魚が食べる

虫のエサや、土中で栄養分と

なって染み出し川を豊かにし

ます。

歴史ある漁村では、魚は森

のあるところに付くと経験

的に知られていました。沿岸

の森林は「魚つき林」と呼ば

れ、江戸時代は各藩が厳しく

管理していました。明治期

以降は管理が緩み、明治30年

に「魚つき保安林」が制定さ

れたものの、乱伐で森は荒

廃。明治末期のえりも岬は

「えりも砂漠」と呼ばれる裸

砂まみれになるほどでした。

「昭和21年、別海町尾岱沼

の野付半島に何百年も繁茂

してきた魚つき林を伐採する

という営林署の決定に漁民た

ちが反対し、伐採計画が中止

されました」と、北海道漁協

女性部連絡協議会事務局の

市原宏行次長は話します。

歴史ある 漁村が知る 「魚つき林」の 重要性

昭和52年、200海里の排
他的経済水域が設定され、前
浜での生産を高める環境保
全に関心が集まるようになり
ました。

そのような状況のもとで
「浜の母さん」が立ち上がり
ます。昭和63年に30周年を迎
える同協議会の役員会が記
念事業に「おさかな殖やす全
道一斉植樹活動」を決定。前
年に各地区が研修会を実施
し、同年6月に30周年の記念
植樹、9月には全道95漁協婦
人部（現・女性部）の参加で約
7万3千本を各地で植樹。以

降、この「育植樹を「お魚殖やす植樹運動」と名付け、継続していくこととなりました。

運動は大きなインパクトをもたらし、平成4年には北海道漁協組合長会議が植樹活動等の取り組み強化を決議。北海道や水産庁、林業団体はもちろん、地域の企業や小中学校などとも連携する大きな運動へと成長していきました。

森のある 浜の回復に 立ち上がった 女性たち

運動の初年度に掲げたキャッチフレーズは「100年かけて100年前の自然の浜を」。ニシン漁全盛期で年間約100トンの水揚げがあった100年前(明治30年)の北海道の浜を、当時のような姿で100年後の子や孫に手渡したいという想いが込められています。「今後も植樹活動を続けて、70年後はニシン再来を」と市原次長は期待しています。地道な運動の継続で平成26年には植樹本数が累計100



万本を達成。平成28年には、これまで運動のプラットフォームとなっていた「漁民の森づくり推進協議会」を発展的に改編するあたりで「お魚殖やす植樹運動推進会議」を発足。外部団体とより協力しやすい組織で、100周年を目指します。

植樹活動を担う各地の漁協女性部 森をつくる「浜の母さん」



01 北るもい漁業協同組合

<http://www.gyokyo.net>

- 設立/平成16年(天塩支所の前身漁協は昭和24年)
- 特産物/シジミ・鮭・ホッキ・タコ・ヒラメ・ヤリイカ・ウニ・ホタテ・カレイ・えびなど
- 女性部長/古川 美香 ●女性部員/25名(30~60代)

平成8年から植樹活動をスタート。これまでに24回、約5千本を植えてきました。昨年はヤチダモやカシワなどの苗木210本を植樹。豊かな森と川・海を孫たちに引き継ぐことを目標とする活動を通じ、高校などとの地域交流も促されたといいます。



02 苫小牧漁業協同組合

<http://www.tomagyo.com/>

- 設立/昭和24年(母体の勇弘白老漁業協同組合は明治21年)
- 特産物/ホッキ・カレイ・秋鮭・毛ガニ・スケウダラなど
- 女性部長/山口 加津子 ●女性部員/25名(30~70代)

昭和63年の事業開始時から活動に取り組んできた漁協女性部のひとつ。植樹は地元企業の王子製紙と合同で行い、これまでに30回でミスナラとアカエゾマツ計3万本を植樹。昨年はコープさっぽろや室蘭開発建設部、苫小牧駅前商店街振興組合も参加。105名を集め、苗木500本を植樹しました。

03 頓別漁業協同組合

- 設立/昭和24年
- 女性部長/高松 美津枝
- 特産物/ホタテ、秋鮭、毛ガニなど
- 女性部員/20名(40~70代)

最初の植樹は平成9年6月。以来、女性部員だけでなく青年部員も積極的に参加して、これまでに約4千本の苗木を植えてきました。植樹活動は役場や振興局森林室など地域の方々とも協力して行っているため、川や海を守る森の大切さを水産関係者以外にも知ってもらいよい機会になっているといえます。



* 使途限定型募金は、寄附者があらかじめ使途を限定して募金ができるしくみです。



OSAKANA FUYASU SUPPORTING GROUP

お寿司屋さんが毎年応援

北海道酪農生活衛生同業組合

「鮭は魚が命、その魚の命を育むのは水と森林」との考えのもと、平成12年から緑の募金への寄附を開始し、「鮭の森」造成などの活動を実施。平成30年度で総額927万円となった募金の一部は、使途限定型募金として「お魚殖やす植樹運動」を応援するために使われています。

OSAKANA FUYASU SUPPORTING GROUP

大漁旗の自販機で寄附

株式会社エスシー・アベックス

大漁旗をラッピングした印象的な自動販売機は、売上げの一部が「お魚殖やす植樹運動」を応援する使途限定型募金に寄附されています。平成31年1月現在で設置はフィッシュランド手稲店・環状通北郷店・苫小牧店、千歳市森林組合の4カ所。今後も増やしていく予定です。



この自販機売上の売上げの一部は、北海道お魚殖やす植樹運動を応援するために活用されます。

使途限定型の緑の募金を活用

お魚殖やす応援団



名寄市立大学 保健福祉学部 社会保育学科 准教授
柳原 高文さん

北海道名寄市在住。宇都宮大学農学部大学院を経て、一般社団法人全国森林レクリエーション協会 主席研究員、森林インストラクターとして子どもたちに森林環境教育を実践している。現在、北海道名寄市立中名寄小学校「風の子教室」、東保育所「森のようちえん」を行っている。

主な著書 「森のようちえん」アクティビティ集（一般社団法人全国森林レクリエーション協会）、入門編 森で行う園外保育森のようちえん（一般社団法人全国森林レクリエーション協会）他

「森のようちえん」で見られる アクティブ・ラーニング

幼児を森で保育する「森のようちえん」は1950年頃デンマークで始まり、その後ドイツやスウェーデンへと広がっていきました。我が国の「森のようちえん」の形態は、保護者を含む自主的なグループが通年で運営する自主保育の形式、園外活動の一部に取り入れている幼稚園や認可保育園(所)、自然学校や任意型団体が行事で実行するなどに分類することができます。多様な生き物が「食う・食われる」の関係を保ちながらダイナミックに生育、生息している森で行う「森のようちえん」で、自然の大きさ・不思議さ・美しさに感動し、仲間とわかち合う「アクティブ・ラーニング」の基礎となる活動が行われているのではないかと考え調査をしました。結果、幼児たちで行われている活動から、自ら課題を発見し協働していることが分かり、これがアクティブ・ラーニングの基礎となることが考えられました。

北海道北広島市に位置する広島幼稚園の所有する「やかましの森」は園舎からバスを利用して約5分の場所にあります。高低差約30m、広葉樹を中心とした二次林で敷地面積は約14000坪で、園が管理しています。主な樹種は、ミズナラ、カツラ、イタヤカエデ、

オオモミジ、ハウチワカエデ、キタコブシ、ホオノキ、ミヤマザクラなど新緑や紅葉が美しい高木が生育しています。幼児たちは、森の恵みとして、春はアズキナ(ユキザサ)を主とした山菜、秋はヤマブドウ、コクワ(サルナシ)などの実を収穫して食べています。

幼児たちは「やかましの森」に入ると、荷物を置き、輪になって「森の歌」を歌い、心を静めた後に当日の注意を聞き、その後は集合の鈴の音になるまで自由に行動しますが、幼児たちだけが見えない場所に行くことは禁止されています。

やかましの森には幅2mくらいの小川が流れています。6月、エゾハルゼミが鳴く頃、川の流れ着く先を見たい幼児4名が川を下り始めました。(その後他の4名が合流する)。小川の水位は雨量によって変動しますが、この日の水位は、深い部分は幼児の腰の辺りまであり、先生から「ひざまである深さは危険」と注意されていました。4名の幼児たちは、水深の浅いところは川に入り進み始めました。深い場所にさしかかると、一人の幼児が足を入れてみて、深さを確かめました。「だめだ、深いぞ!戻って反対側を渡ろう」とその幼児が指示を出しました。幼児4名の相談の結果、少し戻り浅い場所を見つけ川を渡るようになりました。幼児たちは、笹の生い茂った川岸を前進しますが、また深い水深と立ち木に進路を阻まれます。「だめだ〜どうしよう?」と相談が始まりました。意を決し、一人の幼児が木に抱きつくようにして体を固定し、慎重に回るように通過する

と、残りの幼児もまねをしながら無事通過することができました。その後はコツをつかんだのか、倒木があっても上手にすり抜けながら前進していきます。「わ〜すご〜い!」。先頭の幼児が感嘆の声を上げます。その場所に到達した残りの幼児たちも立ちすくんで景色に感動しています。そこは、他の小川と合流している場所で、イタヤカエデ、ミズナラ、カツラの高木の葉が生い茂る緑色の空から差し込む光が幻想的な景色をつくっている美しい場所でした。「きれ〜い!」、「すご〜いね!宝の場所だね!」。探検の達成感を仲間とわかち合う幼児たちの姿が見られました。



このように、幼児たちは森という場所で、願望から生まれる「課題」を解決していきます。個人力で解決できることもありますが、仲間と知恵を出し合い、協働することで解決できることが多くあります。これは、文部科学省が新しい教育の形として考えている、アクティブ・ラーニングの基礎となる活動と考えられます。さらに、協働することでコミュニケーション力を育むことにもつながっていきます。このような活動ができるのは、遊びながら多くの「課題」を発見できる、多様性のある森だからであると思います。このような幼児期からの森林環境教育は、幼児たちに多くの「学び」を与えると考えられます。

